

樋口一葉の社会批評性をめぐって

—「にぎりえ」「十三夜」「この子」「われから」を中心に—

岡田 亜由未

「闇櫻」をはじめとした一葉の初期中期作品には抒情的なものが多くとされている。だが明治二十六年三月三十一日に発表された「雪の日」などには、一葉の内実を顧みようとしない世間への批評が窺える。そしてこのような世間あるいは社会への批評は、下谷龍泉寺町での生活後に執筆された後期作品に顕著となる。本発表では、明治二十八年から二十九年までに執筆された「にぎりえ」(Ⅰ)「十三夜」(Ⅱ)「この子」(Ⅲ)「われから」(Ⅳ)の女主人公たちに着目し、日記などの資料を論拠として、一葉の社会批評性について考察した。

四作品の女主人公について考察すると、(Ⅰ)現状から脱却しようとしたが賤しい身ゆえに諦めざるを得なかった女性、(Ⅱ)母性を捨てて現状から脱却しようとしたものの縁故ゆえに諦めさせられた女性、(Ⅲ)母性を獲得し妻や母の立場に徹した女性、(Ⅳ)妻や母としての自覚を最後まで獲得することができなかった女性に分類することができる。更に(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅳ)系の女性には救われず、(Ⅲ)の妻や母の立場に徹した女性のみが救われていることが読み取れる。このような女性を描き出すことで、一葉は「女性を家庭の中に囲もうとする」風潮に反発し、しいてはそうした社会を批評しているのである。

その論拠は一葉自身の立場にある。一葉は樋口家の戸主であった。明治二十年、長男の泉太郎が没する。次男の虎之助は既に分籍されていて、長女のふじは他家に嫁いでいた。この時、父則義は五十八歳で、母たきは五十四歳であった。当時の慣習からすると、隠居扱いである。そこで則義が後見人となり、明治二十一年、一葉は十六歳で相続戸主となるのである。それゆえ一葉は結婚することが困難であった。このことは、明治二十五年六月二十二日付「日記」や、同年八月二十二日付「しのぶぐさ」などに見られる。また樋口家は、泉太郎の治療費と一葉が通った萩の舎の月謝代、則義の荷車請負業組合の経営失敗により傾いてゆく。則義が没した後は、多額の借金が残された。一葉は借金を返済し、母や妹を養うために小説で生計を立てていたのである。当时は、身分の高い男性との縁を得て、家庭に入ることこそが「婦女のふむべき道」だっ

たと言ってもよい。一葉が最も親しく付き合っていた友人の伊東夏子が『一葉の想ひ出』(昭和二十五年二月一日、潮鳴會)の中で証言しているように、一葉のような若い女性が、結婚もせず、小説で生計を立てることはとても考えられなかった。すなわち、一葉は普通の女性とは異なる立場にいたのである。一葉自身、結婚もせずに小説で家族を養っていたことを「人にはあなづられ世にかるしめられ恥辱困難一つに非ず」(明治二十五年九月一日付「しのぶぐさ」)「いたりがたき心のはかなさはなべてのよの中道を経がたくしてやうやう大方の人にことなりゆく」(明治二十六年七月十二日付「につ記」)と感じていたようだ。

また「女性を家庭の中に囲もうとする」社会風潮への一葉の批評意識は、下谷龍泉寺町での生活(明治二十六年～二十七年代)と、本郷丸山福山町での生活(明治二十七年～二十九年代)によって深められたといえる。当時の龍泉寺町や丸山福山町では、人力車夫や酌婦などが多く暮らしていた。彼らは、その貧しさや職業ゆえに世間の人々から蔑視されていたのである。

明治二十六年七月二十日、一葉は菊坂町から下谷龍泉寺町に引っ越して荒物駄菓子店を開いた。文学界同人の馬場孤蝶が『明治文壇の人々』(昭和十七年十一月、三田文学出版部)の中で証言しているように、一家は吉原遊郭付近で生活しており、それほど裕福でなかった。一葉は、この吉原遊郭で生計を立てていた。一葉自身「おと、しの此ころハ大音寺前に一文くわしならへて乞食を相手に朝夕を暮らしつる」(明治二十八年十月頃「水のうへ日記」)「一昨年の春ハ大音寺前に一文くわしうりて親せき近よらず故旧音なふ物なく来る客とてハ悪処のかすに舌つゝミ打つ人々成し」(明治二十九年一月頃「水のうへ」)と回顧している。一葉は、このような人々をどのような目線で捉えていたのだろうか。まずは龍泉寺町に転居する以前の一葉から見ていきたい。

明治二十五年十二月二十八日付「よもきふにつ記」によると、一葉は原稿料の一部を見舞いとして稲葉鉦の所に持って行った。鉦は一葉の母が乳母として仕えた稲葉大膳正方の養女である。かつて稲葉家は二千五百石の旗本だったが、入り婿の寛が様々な事業に取り組んで失敗し、当時は極貧生活を送っていた。寛は当時の下層階級の主要な職業とされていた人力車夫や日傭人足の仕事をして生計を立てていた。一葉は「涙の種也」「はかなし」などと感じながらも、その視線は「かれの、薄の様」になっ

る。龍泉寺町に転居する前の一葉は、下層社会に生きる人々を客観的に捉えていたといえよう。

では龍泉寺町に転居したばかりの一葉はどうであつたろうか。明治二十六年七月二十日付「塵之中」に「人力ひく」ような賤しい男たちでも、自分たちの店の客になるので逆らつてはいけなさと記されていることや「かくあやしき塵の中にまじはるゝ」などと記されていることから、やはり一葉は下層社会を見下ろしていたことが推察される。しかしそれは、明治二十六年の八月三日を境に変化する（「塵の中」）。いささか長くはなるが、重要な箇所なので引用する。

毎夜廓に心中ものなど三昧線に合せてよみうりする女あり歳ハ三十の上いくつ成るべきにや水淺黄にうろこ形のゆかたきて帯ハ黒じゆすの丸帶をしめ吉原かぶりに手ぬぐひかぶりて柄長の提燈を襟にさしたるさま小生意氣にしやんとして其むかしハ何成けん驚なかせし未なるべきかまた捨てたき葉櫻の色を捨てゝのあきなひと見れば大悟のひじりの心地もすれどあるひハ買かぶりの我れ主義に而仇な小哥の聲自まんこれに心をとゞめよとにやすけんぞめきの格子先一寸一服袖引たばこあがれあがるの問答に心うかるゝたはれをはしらず粹が身をくふおもふどし二かいせかれてしのびあし籬にからむつたのもん松の太夫とさゝやきの哀れ命を引四つのかねに限りゑんをう瓦上おく霜の明日をもまたじとおもひつめし身にハいかに身にしみて心ほそかるへきほそく澄たる聲はりあげて糸の音色もしめやかに大路小路をながしゆくうしろ姿これが哀かかれが哀か

前述した「よもきふにつ記」の記事では、一葉の視線は貧しくみすばらしい身形に注がれていたが、ここでは「毎夜廓に心中ものなど三昧線に合せてよみうりする」女性の境涯に注がれている。平出鏗二郎『東京風俗誌』上の巻（明治三十二年十月二十八日、富山房）〈大藤時彦編『明治文化資料叢書』第十一巻世相篇（昭和三十五年十月三十日、風間書房）収録〉の資料によると「よみうり」は辻芸人の一種で、貧民が生計を立てるために行っていた芸のようである。このような、社会的には貧しく賤しい身分の人々の境涯に踏み込もうとする姿勢は「にぎりえ」の「菊の井のお力とても悪魔の生れ替りにはあるまじ」「人の涕は百年も我まんして、我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ他處目も養ひつらめ」などという表現に投影されていく。また、このような龍泉寺町での生活体験が、次の丸山福山町で一葉に酌婦たちと積極的な交流をさせる。

明治二十七年五月一日、一葉は龍泉寺町の店を閉じて丸山福山町へと転居する。当時の丸山福山町には、砲兵工廠に勤める職工達の住居と銘酒屋が多く存在していた。親類付き合いをしていた西村家を通して一葉と知り合いになった穴澤清次郎が「一葉女史の想い出」（『解釈』第四巻第二号、昭和三十三年二月一日）の中で証言しているように、一葉は酌婦の代筆をしていたようだ。一葉自身「となりに酒うる家あり女子あまた居て客のとぎをする事うたひめのごとく遊びめに似たりつねに文かきてたまはれとてわがもとにもて来るぬしはいつもかはりてそのかずはかりがたし」（明治二十八年一月四日付「しのぶぐさ」と述べている。また一葉は、隣宅の銘酒屋「浦島や」に奉公する小林あいという女性を匿い、その面倒も見ている。このことは、明治二十七年七月二十日付「水の上日記」に見られる。「女性を家庭の中に囲もうとする」社会風潮への批評意識は、このような下谷龍泉寺町と丸山福山町での生活によって深められていった。

以上、「にぎりえ」（Ⅰ）「十三夜」（Ⅱ）「この子」（Ⅲ）「われから」（Ⅳ）の四作品の主人公に着目してきた。その結果、（Ⅰ）現状から脱却しようとしたが賤しい身ゆえに諦めざるを得なかった女性、（Ⅱ）母性を捨てて現状から脱却しようとしたが縁故ゆえに諦めさせられた女性、（Ⅲ）母性を獲得し妻や母の立場に徹した女性、（Ⅳ）妻や母としての自覚を最後まで獲得することができなかった女性に分類することができた。更に（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅳ）系の女性は救われず、（Ⅲ）の母性を獲得し妻や母の立場に徹した女性のみが救われていることが読み取れた。一葉はこのように、妻や母という立場に徹して救われた女性を描出することで「女性を家庭の中に囲もうとする」風潮に反発し、しいてはそうした社会を批評しているのである。

何故なら一葉は、樋口家の戸主ゆゑ独身であり、小説で家族を養っていたからだ。当時は、身分の高い男性との良縁を得て家庭に入ることこそが「婦女のふむべき道」だという風潮が強かった。それゆゑ結婚もせず小説で生計を立てていた一葉は、普通の女性とは異なる立場にいたのである。一葉自身「大方の人にことなりゆく」などという意識を持っていた。更にこのような社会への批評意識は、下谷龍泉寺町や本郷丸山福山町での生活によって深められた。当時の龍泉寺町や丸山福山町には人力車夫や娼婦たちが多く暮らしており、彼らは一般社会から蔑視される存在であった。このような人々と積極的に交流することで、一葉は「女性を家庭の中に囲もうとする」社会への批評意識を深めていったのである。

（大学院文学研究科博士後期課程国文学専攻）